

巻頭言 「信頼する心」

宇野 元

人間の幸福について、聖書に次のように記されています。

いかに幸いなことか……

主の教えを愛し

その教えを昼も夜も口ずさむ人。

その人は流れのほとりに植えられた木。

ときが巡り来れば実を結び

葉もしおれることがない。(詩編 1, 1-3)

流れのほとりにある木は、のびのびと枝を張り、実をむすぶ。神の言葉にたずね、求める人、心に留める人はそのようである。その人の実り、それは賜るものであり、時が来れば与えられる。だから、落ち着いて信頼していればよい。そして聖書は次のように知らせてくれます。イエス・キリストが流れのひとりである。だから、どんなに不甲斐ない自分を示されても、どんなに無力さを感じても、あなたがたはくじけないよう導かれている。世の矛盾をみても、憂いに支配されないように。忍耐と同時に希望を保つように。

それゆえ、晩年のクリストフ・ブルームハルトは、若い人たちに「君らしくありなさい」と語ることができたのでしょう。またカール・バルトは、次男が宣教師としてインドネシアに出発する際、なにげなく言った言葉を心に留めました。「自分にできることをするだけだよ。」

同じことが 2022 年の私たちにも当てはまるでしょう。謙遜に。しかし絶えず神の言葉から大きな希望をいただいて、信頼する心で持ち場に立っているように。コロナ禍においても、ファリサイ派的な他者への批判に与せず、自分を責めさいなむことなく。苦い心や悲観から解き放たれて。

古い友人からの新年の便りにこう記されていました。心が痛むことが多くある。それでも諦めずに、ささやかな生活の場でも、神様の平和を模索し求めていきたい。

なぜそう思えるのだろうか？ 神のみこころはひとつ、それを飼い葉桶のおさなごが証しているから。イエス・キリストの十字架と復活により、神の深い顧みが動かないものとされているから。